

【特別講演Ⅱ】

仲景処方の由来と変化

真柳 誠

茨城大学大学院人文科学研究科

1. 仲景処方の由来—剤型と配剤から

前2世紀から後1世紀初期までの出土医書からすると、傷寒などの発汗には烏頭や附子+細辛等の散剤や丸剤が多く、桂+麻黄の湯剤はみえない。瀉下には巴豆や芫花等の丸剤・散剤が多く、大黄の湯剤はみえない。モンゴル近辺の麻黄・甘草・黃耆と南方の桂・生薑は、始皇帝の統一（前221）から使用可能となったばかり。チベット高原の大黄も併用できるのは前漢（前206-後6）以降だからである。前漢では桂・薑で調味した肉料理が王侯貴族に珍味とされていた。3世紀中期でも北方では桂・薑・人参が高価だった。これらを多用する3世紀初期の仲景処方は、かならずや前漢・後漢の宮廷医方に依拠している。

前漢から唐代までは食官と医官が宮廷に併置され、食官は五味+トロ味の調和を重視した肉+野菜ないし米の羹、濾過した美味スープで王侯の健康維持をはかっていた。前113年の王墓からは医官が使用した湯剤濾過器が出土し、前1世紀には『湯液經法』32巻も編纂されている。食官の影響にちがいない。出土文献の処方は苦酸鹹味が主で、散剤や丸剤に味の配慮は無用だろう。一方、湯剤は貴人むけなら味覚の配慮も必要だった。ゆえに仲景湯剤の多くは大棗+甘草+薑や桂+甘草のスープベースがあり、甘味と辛味による「胃氣」の保護をはかっている。石膏剤の粳米も同目的である。仲景処方は方後の飲食指示や甘麦大棗湯・当帰生薑羊肉湯のごとく、食官の思想と技法を援用したのだった。

傷寒治方は出土書に1世紀初期からみえ、仲景よりやや前の華佗も巧みだった。仲景はそれら烏頭附子剤による発汗や、巴豆芫花剤による瀉下を批判する。はるかに毒性の低い桂+麻黄や大黄+芒硝の湯剤で安全な発汗・瀉下が可能で、加減により病状変化に対応できるからだった。しかし容易で確実な華佗式の発汗・瀉下方は以後も使用され、両者の折衷方も多数あったことは『小品方』『千金方』『外台秘要方』『医心方』などでわかる。

2. 伝承と変化—可不可から三陰三陽

仲景は傷寒発汗・瀉下の時期区分に『素問』熱論篇の三陰三陽を転用したが、条文は汗吐下の可不可で分類しただろう。現『傷寒論』三陰三陽篇は条文の過半が太陽病篇で、ついで陽明病篇と三陰病篇、最短が少陽病篇となっている。三陰三陽分類が眼目なら、かくも不自然なアンバランスが生じるはずもない。3 世紀前中期の『脈經』が引用する仲景佚文は可不可分類で、『小品』(454-73) と『諸病源候論』(610) の仲景佚文には三陰三陽の痕跡がない。『千金』(650-58) も傷寒治方を汗吐下で分類する。そして三陰三陽分類が初出するのは『千金翼』(733-52) だった。『外台』(752) 所引の『仲景傷寒論』18 卷は三陰三陽篇・可不可篇・雜病篇に分類され、現『傷寒』+『金匱』に近似する。

一方、唐代の医官育成は開元 7 年令 (719) まで兼習書に『小品方』を規定していた。これは開元 25 年令 (737) で『傷寒論』に変更され、北宋の天聖 7 年令 (1029) まで踏襲された。ならば現『傷寒』のルーツは 737 年直前に唐政府が編纂した『仲景傷寒論』18 卷の三陰三陽篇・可不可篇とみていい。当段階で可不可篇等から三陰三陽篇を類編したと判断すべきだろう。ゆえに『千金翼』ではじめて三陰三陽分類が出現したのだった。

①唐『仲景傷寒論』系統の傷寒部分が現『金匱玉函經』で、字句は『千金翼』と近い。北宋の②高継沖本も唐『仲景傷寒論』系の傷寒部分で、②に基づく北宋③大字校刊本 (1065) と④小字再校刊本 (1088)、南宋の⑤小字再々校刊本 (1150-60 頃) で変化が重なった。⑤は⑥元初の翻刻でも改変された。明の趙開美が⑥を宋版と誤認し、版式まで改変したのが現在の⑦『[宋板] 傷寒論』(1599) である。①～⑤でいかなる改変がなされたかは今後の課題だが、多面にわたっていたことは疑いない。

【プロフィール】

1977 年：東京理科大学薬学部卒

1983 年：北京中医院院進修課程卒

1992 年：博士（医学）

1992 年：北里研究所東洋医学総合研究所医史文献研究室研究員

1994 年：同医史学研究部主任研究員

1995 年：同医史学研究部・医史文献研究室室長

1996 年：茨城大学人文学部教授・同大学院人文科学研究科教授

現在　日本医史学会常任理事、中国出土資料学会理事、東亞医学協会理事、日本薬史学会評議員、日本東洋医学雑誌編集委員、中国科技雑誌編集委員、中華医史雑誌編集委員、南京中医薬大学客員教授